

「真の自己」

～命をかけて本当の自分になろう～

創世記4：1～15

狼は大きくて強くて日本に生息する動物の中では最も強いそうです。日本狼は絶滅したと言われていますが、オオカミと犬を交配させたオオカミ犬。オオカミ犬の交配を繰り返し5代目となったオオカミ犬は98.9%オオカミの血となります。大きくて強いオオカミの血が濃いオオカミ犬ですが、人を恐れ、飼主以外の人に全くつきません。その姿は外見と反して驚きます。日本狼は人間によって殺され、絶滅においやられました。遺伝子の記憶として人間が怖いのです。価値観が遺伝子に記憶され継承されていくのは人間も同じです。オオカミ犬の姿はそれを証明してくれています。

■ カインとアベル

アダムとエバが禁断の木の実を食べたので地は呪われました。生涯苦勞して食べ物を得なければならなくなりました。神様は人に「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をほう全ての生き物を支配せよ。」と仰せられましたが、アダムとエバは管理すべき生き物に誘惑されて罪をおかしてしまったのです。そのため、世の秩序は乱れたのです。その後、アダムとエバにはカインとアベルが生まれました。カインは土を耕す者になりました。カインはエデンの園から追放され、絶望の中を生きる両親を見て育ったので、両親の生きざまを背負って生きて行く決意をしました。アベルは羊を飼う者になりました。両親が争う姿や、父や兄が苦勞しても実がならない姿を客観的に見ていたので、もう一度、エデンの園に戻る方法を考えようとなりました。罪を覆うためには血を流さなければならぬことを知っていたのです。それはアダムが裸であることの恥ずかしさを知り、イチジクの葉で覆っていた時に、神様は動物を殺し、皮をはぎ、着物を作ってくれたのを知っていたのです。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはない」からです（ヘブル9：22）。後の世でも固い決意を血判で示しました。血を流すことは、約束を果たせなければ命に替えるという強い決意なのです。ある時ふたりはそれぞれ神に捧げものをしました。カインはとれた作物を、アベルは群れのなかからもっとも肥えた初子を捧げました。神様はアベルの供え物には目をとめました。カインの供え物には目をとめませんでした。カインはひどく怒って顔を伏せましたが、神様はカインの捧げものを喜ばなかったのではなく、カインよりアベルが好きだったわけでもありません。「見よ。聞き従うことはいけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」（サムエル15：22）また、「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する」ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりもずっとすぐれています。（マルコ12：33）と書かれています。神様はカインに気を留め語りかけました。「あなたが正しく行ったのであれば受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを悪い慕っている。だが、あなたはそれを治めるべきである。」と。神様に喜ばれたのは供え物ではなく、絶望の中から神様に立ち返ることを求めたアベルの姿だったのです。

■ 自分の特徴を上げてみてください。

自分の中に相反する性質がないでしょうか？好きな人にはいい態度、嫌いな人には悪い態度。社会ではきっちり仕事をこなしているのに、家は散らかりっぱなし。人は第三者を通して自己を措定します。自分で自己を措定するのは基本的には不可能であると言われていきます。ですから人との関係の中で、自分はどうか見られているのかと考え、周りから受けた対応によって複数の自己ができあがるのです。相反する性質、それは自己が統

合できなくなって現れています。自分の思い通りの反応が人から得られない時、例えば悪気がないのに人を怒らせた時、きつく言ったつもりもないのに人を傷つけた時、自分は相手にどう映っているのだろうかと考えます。1人で悩んでいると、自分を否定して落ち込んでしまう、そうならないために、人はテレビをつけたり、お酒を飲んだりして、自分の本当の心を見ないようにします。1人になると考えてしまうので孤独を嫌うようになります。しかし、人は第三者と関わって自分を見つめ、1人になって考える以外に自己を知ることにはできないのです。自分の問題を見つめた時、「どうせ自分は…」と諦めたい気持ちになります。自分を責めたり、劣等感に陥る必要はなく、本当の自己に反する性質の自己が死んでしまえばいいのです。邪魔してくる「統合されていない自己」を殺せばいいのです。「統合されていない自己」は周りの対応からできた、つまり自分を守るために身に付けた鎧ですから、周りの環境が変わらないのに脱ぐのは大変です。本当の自己ではないとわかってもなかなか脱げないのです。傷ついて「統合されていない自己」がたくさんあるほど、それを捨てなければ周りの人とうまく付き合えるはずがありません。自分が相手を否定したつもりはなくても「統合されていない自己」が無意識に表情や態度で示したり、傷つけたりしているのです。第三者を通してしか自己を措定できない人間が正しく本当の自己に戻ろうとするなら神様に頼る以外に方法はないのです。

■ ①関係による自己に絶望する

では神様に頼る方法とは何でしょう。「自分はどのようにしてこうなんだろう」と自分を責めるのではなく、「こんな自己はいらない！」と捨てる覚悟をしましょう。関係による自己ですから、自分を責めなくいいのです。「統合されていない自己」に絶望してしまえばいいのです。

■ ②罪を知り神に頼る

そして、「統合されていない自己」が犯してしまう罪を素直に認めましょう。アベルは素直に神様に従うことができたが、カインは絶望の中で素直になれず、弟を殺してしまうという罪に至った末、やっと「私の咎は大きすぎてにないきれません。」と罪を認めたのです。イエス様が十字架に架かって私達の罪を贖ってくれたので、血を流す生贄による贖いは必要ありません。私たちは罪を認め、ただ神様に罪を犯してしまう「統合されていない自己」を取り除いて下さいと祈ればいいのです。

■ ③キリストに措定する

イエス様の姿を想像する時、人によって思う姿は異なります。想像するイエス様の姿が神様に造られた本来の自己の姿なのではないでしょうか。「こうあるべきだ」「こうありたい」と願う姿でイエス様を思うなら、神様に頼るしかありません。ですから私達はいつも「イエス様ならどうするか。」と考えていきます。「統合されていない自己」をひとつずつ取って下さいと祈ります。イエス様に措定した私の本当の姿に戻るように、本当の姿で生きて行きたいと願います。イエス様の姿に造り変えて下さい。